

第 7 5 回 近畿地区 大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

令和3年4月20日 日本建築学会近畿支部

No.	作品名	学生氏名	大学・学科	図面枚数
1	「都心の中の憩いの場」－観光と地域コミュニティのための複合施設－	宮崎 優美	大手前大学 メディア・芸術学部	6
2	SILK FLOW 奈良の魅力を発信する宿泊複合施設	西本 恭輔	帝塚山大学 居住空間デザイン学科	5
3	ひとの拠り所－都市生活における多様なサードプレイスの提案－	木本小百合	大阪市立大学 居住環境学科	13
4	いにしへの眺めに想いをはせる～失われた風景の再編と環境順応建築～	橋本 拓歩	京都精華大学 建築学科	7
5	幸せなオフィス	藤口 悠真	京都工芸繊維大学 デザイン・建築学課程	18
6	緑と共に暮らす－新旧の緑が混在する森のような団地の再生計画－	伊藤 穂花	京都女子大学 生活造形学科	4
7	ウメダクラウド－過密都市における空价－	柴田貴美子	神戸大学 建築学科	18
8	カバンのまちの再構築-豊岡をウラから考える-	太田 健吾	兵庫県立大学 環境人間学科	14
9	UPDATE HOUSING -アフターコロナの住まい方	森田 枝子	武庫川女子大学 生活環境学科	6
10	浄化都市	清水 健	和歌山大学 環境システム学科	37
11	名古屋流 ～バーチャルウォーターが堀川の風景に変わる時～	天野 愛希	摂南大学 建築学科	22
12	景の増幅 ～阪南市貝掛海岸における風景体験～	古川あかね	関西大学 建築学科	2
13	あの口、陸奥の驛舎で… ～鉄道が繋ぐ、記憶を創る場所～	佐藤 桃佳	大阪工業大学 空間デザイン学科	10
14	まちのがっこう	中嶋沙也香	神戸芸術工科大学 環境デザイン学科	20
15	地元住口と観光客が交流する宿泊施設の提案	下口奈口	滋賀県立大学 生活デザイン学科	4
16	積層する多世代共生の街	藤田 知大	大阪芸術大学 建築学科	12
17	まちの内的秩序を描く 一意図せずできた魅力的な空間から導く住まいの提案－	中野 紗希	立命館大学 建築都市デザイン学科	14
18	閑所ホテル	川島 史也	京都府立大学 環境デザイン学科	13
19	長島協奏曲	篠山 航大	神戸大学 建築学科	8
20	みゆきもりくんモノガタリ －小学校の終焉となつかしい未来－	化生 真依	大阪大学 地球総合工学科	13
21	スキマ－都市の中につくるだれかの居場所	口柳 涼	成安造形工科大学 芸術学科	13
22	塀とともに歩む、これから	檀野 莉子	京都工芸繊維大学 デザイン・建築学課程	3
23	rhythms－京橋駅におけるリズムの発掘、それに伴う情緒の顕れについて－	周戸南々香	京都大学 建築学科	20
24	社会に還る ～新たなスタート地点としての刑務所～	山本 祐子	奈良女子大学 住環境学科	20
25	見えない日常 Riddle Story Museum of Edward Gorey	真壁 智生	大阪工業大学 建築学科	6
26	モノ・ポリの森 －自立的な学びが生まれる小中学校－	久保 瑞季	武庫川女子大学 建築学科	6
27	今昔を紡ぐ人と自然のものがたり	福嶋 章乃	京都芸術大学 環境デザイン学科	2
28	「空白」から「余白」へ	岡田 祥太	摂南大学 住環境デザイン学科	7
29	ハレとケとケガレ	山口 紗羅	関西学院大学 都市政策学科	10
30	450meter channel-尾道水道と共に観る、せとうち美術館	佐多 慶秋	大阪市立大学 建築学科	8

(受付順) 以上30点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
令和2年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第75回）審査報告

審査員長 近藤 努

令和3年4月20日（水） 審査会場：Web会議システムを利用

審査員長（互選） 近藤 努
審査員（50音順） 久保 岳・白戸義則・松井宣明・松森織江・森 雅章・山田義浩
応募作品 30点（別紙参照）

審査経緯

第75回審査会は、新型コロナウイルス対策のため、前年に引き続きWEBによる審査会となった。審査員は、設計事務所、ゼネコン設計部所属による7名で構成された。あらかじめ届けられた応募作品の電子データを、各審査員が十分に内容を読み込んだ上で審査会に臨み、様々な視点からの審査を心掛けた。なを、審査員のうち1名は都合により審査会には不参加となったが、事前に推薦作品を選定頂き、審査会の投票に反映している。

第1次審査では、応募30作品に対して、各審査員が推薦する作品に6票を投票し、5票が1作品、4票が3作品、3票が1作品、2票が4作品、1票が8作品となった。この時点で得票のなかった作品を除く17作品について、1作品ずつ協議を行った。各作品は、課題の立て方から、解決方法の導き方、それらを表現する手法等も、多岐にわたるため、審査員の不明による優れた点の見落としを避けるため、得票数の少ない作品に対しては、特に丁寧に議論を進めた。

第1次審査での議論を経て、第2次審査では各審査員3~5票の投票を行った。この結果、6票が1作品、5票が1作品、4票が1作品、3票が2作品、2票が1作品、1票が2作品となった。この段階で、絞り込まれてきた作品について、各審査員の評価する点について改めて議論を行った。

第3次審査では、各審査員が3票の投票を行った。5票1作品、4票2作品、3票1作品、2票1作品となった。得票数が僅差であるため、再度審査員間で議論し、第4次審査に臨んだ。

様々な議論を経た後、第4次審査では、各審査員が3票の投票を行い、6票1作品、5票1作品、4票1作品、3票1作品となった。この結果から、上位3作品を入選作品として決定することとした。

なお、入選作品の中には、第1次審査での投票得票数は1票であったが、最終審査に至る議論の中で、審査員の理解の深まりと共に得票数を伸ばし、最終的に入選に至ったものもある。限られた審査環境の中であったが、作品の持つ美点を見逃すまいとする、各審査員の真摯な議論によるものである。

（近藤）

審査概評

今年の卒業設計は、コロナ禍という例年と異なる環境の中で取り組まれた。各大学を代表する魅力的な30作品の応募があった。審査は、感染防止の観点から昨年同様、事前に送付されたPDFデータを審査員が読み込んだ上で、リモートにて行われた。

卒業設計は、時代を反映するテーマが選択される傾向がある。しかし、コロナ禍による新しい生活様式を切り口とした作品は少なかった。一方で、先行研究を整理した上で、課題を明確に提起し、建築化していく作品が目立った。綿密な調査と分析からの建築化、圧倒的な表現力による独自の世界観の造形化、数々の手書きのスケッチに基づいた空間づくり、地域の現状を踏まえた課題解決提案、土木的スケールからの魅力化などバリエーション豊かな作品が集まった。

評価された作品は、課題設定、コンセプトとストーリーづくり、表現力と造形力について、学生らしさを兼ね備えながら、丁寧かつ既視感のないものが選定された。3作品の選定に至るまでに4回の投票と議論を重ねた。入選作の詳細は選評に委ねるが、惜しくも選外となった作品についても、キラリと光るものが多かった。

(森)

名古屋流～バーチャルウォーターが堀川の風景に変わるとき～

天野 愛希君 (摂南大学)

名古屋の産業の源流である木工業の発達に寄与した堀川の歴史的価値に着目し、堀川をモノづくり精神の聖地として再生することによって、市民のシビックプライドを再構築することを目指した計画である。

評価したのは何といても説得力である。まず繁栄の面影を失っている堀川の歴史的・文化的意義を掘り起こし、名所図会から過去の市民のシエマを読み取ることで再生する河岸幅を設定している。次に選定した3つの敷地に対し再現すべき産業モデルとその建築順序を計画し、さらに水上交通などのイベントや、河口の木場との広域連携へと構想を展開していくストーリーは、人々が集まる動機をも創り出しており秀逸である。

説明に「河岸空間を広場化する」とあるが、カシという言葉には船をつなぎとめる杭の意味があり、ここでは往時の記憶をとどめ、技術を再生し、文化を継承し、情報を発信する現代のカシ（河岸）空間を計画しているとも解釈できる。

計画では徐々に増築していく展開が謳われており、その時間軸の視点にリアリティが感じられる一方、形態が単調にすぎる面もあった。建築する順序や機能に合わせてボリュームや形態を変えることにより、さらに豊かな都市空間に発展できる余地があったことを加えておく。

(山田)

長島協奏曲

篠山 航大君（神戸大学）

かつて国立ハンセン病療養所「長島愛生園」が存在した岡山県瀬戸内市長島がこの作品の計画地である。

審査員一同が高く評価したのは、ハンセン病患者を強制隔離した過去の偏見・差別の歴史に切り込んだテーマ設定、それを表現した造形力、そして模型を含むプレゼン力である。

ここに連れてこられた患者たちが生きていくための唯一の光であった〈音楽〉を取り上げ、チェロ、フルート、ピアノ、バイオリンといった楽器をメタファーとして建築を作り、この島の歴史と記憶を後世に伝承することを意図としている。

冒頭に「・・・ハンセン病の差別の歴史は教わってはいたものの、暗く沈んでいるようにみえたこの「長島」に足を運んだことはいままで一度もなかった。しかし、実際に訪れると、そこは人々の生のエネルギーに満ちた場所であった。・・・」とある。こうした目の前のリアルから感じた新たな発見、沸き上がった情念を深く突き詰めていく中からストーリーを組み立て、高い完成度の作品にまとめた点が、他の作品より一歩抜け審査員の心に留まったのであろう。

（松井）

みゆきもりくんモノガタリ—小学校の終焉となつかしい未来—

化生 真依君（大阪大学）

大阪市で進む大規模な小学校統廃合問題に対し、小学校の記憶・役割の継承を、生徒たちや地域に提案する、という作品である。

2021年3月に統廃合によって閉校される（5月現在、既に閉校されてしまっている）御幸森小学校。その校区を舞台に、3世代にわたる卒業生へのヒアリングをもとに、お気に入りの場所や遊び場の記憶を抽出し、「6つの約束」というまちづくり構想案が示される。

この提案では「絵コンテ」という手法がとられ、街の情景、まちづくり構想案がスケッチとして描かれる。その画力・筆力によって、心象が人々の間で共有され、提案がわかりやすく伝えられるということの評価したい。

またこの提案は、建築の終わり方に対する提案である。建築は役割を終えるが、役割が必要性を失うわけではない。その役割を、人は、まちはどのように継承していくのかというテーマに対し、活動・場所の両面からこたえるというのは、今日の多様化する「設計」行為の根本となるものであろう。

本作品で提示された設計の手法により、作者が今後どのような活動を行っていくのか楽しみにしたい。

（久保）